

2015年1月25日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 21 章 1～9 節

説教：全部を投げ入れたのです

1 神殿の中

1) 金持ちとやもめの女

1 節から 9 節をの流れを追っていくと、前半はやもめの献金のことなのですが、後半はがらっと変わって神殿の話になる。この二つの間に何のつながりもないように見えます。しかし聖書は、ぶつぶつと細切れに書かれているはずはありません。この二つのことにはつながりがある。どんなつながりがあるのか、これから見ていきます。

まず前半のやもめのことから見ます。神殿の中には献金箱が置かれ、その中へりっぱな服を着た金持ちがお金を投げ入れました。いっぽう、貧しいひとりのやもめがやって来て、レプタ銅貨二つを献金箱に入れます。今で言えば数百円の金額です。それをご覧になったイエスは「持っていた生活費の全部を投げ入れた」と言われました。これを聞いて驚かない人はいないでしょう。この女性は明日からどうやって生きていくのか。疑問になります。ところがイエスは、「この貧しいやもめは、どの人よりも沢山投げ入れました」と言って、高く評価するのです。

ここを読んで皆さんは考え込むと思います。イエスは私たちの生活費の全部をささげることが求めているのでしょうか。もちろん、そんなことは言っていない。もし牧師がこの箇所を取り上げてそんなことを言いたら、皆さんはすぐに牧師を教会から追い出すべきです。

2) やもめの家を食いつぶしている

ではイエスは、何を言いたいのか。ここは神殿です。神の宮の中です。その中で何が行われているのか。それを言いたいのです。もう一度この箇所をふり返ります。

まず、りっぱな服で着飾っているお金持ちが入って来て、これ見よがしに献金箱に献金を投げ入れました。次に、貧しいやもめが入って来て手にしていた数百円の財産すべてを投げ入れました。それが神殿の中で起きたことです。

貧しい女性がどうしそこまでしたのか。これは推測になるのですが、律法学者たちがそうしなさいと教えていたからではないかと思われまゝ。「あなたは持っている物を出し惜しみせずにささげなければならない。ささげない者は神の祝福をいただくことはできない。どんなに貧しくても献金せよ。」神殿では律法学者たちが目を光らせチェックしています。この女性は、律法学者が恐くて泣く泣くささげざるを得なかった。そのように考えられます。

そのように考える根拠があります。20 章 47 節でイエスはこう言っています。「律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、やもめの家を食いつぶしている。」「食いつぶす」、言葉を換えれば、やもめを助けるどころか、逆に搾り取っているということです。「パンを買うができなくても、とにかく献金しなければならぬ。」明らかに神の義に反するようなことが、神殿の中で堂々で行われていました。イエスが見逃すはずはありません。そのことはまた後で見参ります。ここまでは

神殿の中で起きていることを見て参りました。

2 神殿の外側

1) 見えるもの

次に4節を読みます。「宮がすばらしい石や奉納物で飾ってあると話していた人々があつた。するとイエスはこう言われた。『あなたがたのしているこれらの物について言えば、石が崩されずに積まれたまま残ることのない日がやってきます。』」先ほどまではやもめの話でしたが、今度は神殿の建物話に変わります。話が神殿の外側に移ったと言ってもよいでしょう。

人々は、すばらしい材料で造られた神殿の建物を見えています。神殿に飾られたさまざまな奉納物、金や銀、宝石で飾られた美しさに声をあげています。しかし、イエスはそんな人々の感動に水を差すかのように、今見ているものは全部こわされる日が来るのだと断言しました。

2) 見えないもの

人々は、肉の目に見えるものに心を留め、美しいとか、すばらしいと言っています。しかしイエスは別の所を見えています。目に見えないものを見ていると言ってもいいでしょう。あなたの肉の目にはすばらしい光景が見え、あまりのすばらしさに心が奪われるかもしれない。けれども、それはほとんど意味がない。そんなものはいつか必ず朽ち果てていく。そうではなくてむしろ目に見えないものに心を留めなさい、そんなふうになっています。

人々は、イエスが神殿が崩されて跡形もなくなってしまうと言ったので急に不安

になり、こんな質問をします。7節。「先生。それでは、これらのことは、いつ起こるのでしょうか。これらのことが起こる時は、どんな前兆があるのでしょうか。」

この質問に対してイエスは終わりが近づく時、どんな事が起こるのかを教えてくださいました。このことはまた次回に詳しく取り上げたいと思います。

実は、神殿が崩される話が出て来るのは、ここが初めてではありません。すでに19章44節に出てきていました。イエスがエルサレムに入る直前のことです。エルサレムの都を見て涙を流しながらこう言います。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」

エルサレムに入る前から、すでにイエスの目には神殿が崩されていくことが見えています。悲惨な戦争が起きて、この町が崩壊していくことにイエスは心を痛めておられます。

3 神殿が崩される

1) なぜ

そもそも、都をエルサレムに定め、そこへ神殿を建てようと確信したのはダビデです。そのために神殿の材料を外国から沢山集め、自分の子であるソロモンに神殿建築事業を託しました。そうやって最初の神殿が建てら

れました。その後何度か崩されたり、修復はされるのですが、とにかく神殿が建てらることは神のご計画であったことには代わりがありません。主も宮に入られ、そこで教えておられます。

それほど大切な神殿であったのに、どうして崩されていくのでしょうか。神は神殿を守らないのでしょうか。いや、神殿だけではありません。イエスは戦争や暴動、大地震や疫病、迫害も起こると預言しました。そこまでわかっているのに、どうして神は止めないのでしょうか。神が人間を愛して下さるというのなら、私たちが悲惨な目に遭わないようにと、災難を食い止めて下さるべきではないのでしょうか。誰もが思う疑問です。

イエスはどうか考えておられるのでしょうか。イエスは戦争や暴動のことを語る時他人事のように語ることはありません。語る以上、ご自分の問題として真剣に考えています。なぜ戦争が起きていくのか、その理由、根本にある問題を見つめておられます。

イエスは何をご覧になっていましたか。前半の部分に戻ります。1節を読みます。「さてイエスが、目を上げてご覧になると、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れていた。」金持ちは、沢山の献金をしたということに満足し、そのすぐかたわらにいた貧しいやもめの女のことは目にも入りません。いっぽう、律法学者たちは、貧しい者から搾り取るようなことをして恥じることはありません。神の神殿の中で、そんなことが堂々で行われているのです。誰が見ても、憤りを覚えるような不公平がまかり通っていたのです。

誤解のないように付け加えますが、金持ちが悪いと言っているわけではありません。貧しい者が誰からも助けられず、ますますひどい

目に遭わされていく。それはあまりにも理不尽である。神の義からもっとも遠い状態だと言いたいのです。そのことを正さない限り、戦争や暴動はなくなるらない。逆にますます激しくなるばかりなのです。

2) ご自分のからだをささげる

神はこの状態を何とかしなければとおおえになります。どうするのでしょうか。イエスは、やもめの女がなけなしのお金を献金箱に入れたことを大変高く評価しました。なぜそうしたのか。貧しい女性とイエスとを比べてみましょう。

律法学者たちは貧しい女を助けようとはしません。かえって食いものにして、持っているものを全部ささげるようにと命じます。パンを買うお金もなくなる訳ですから、この女性はいのちを投げ打ったも同然の状態になります。

イエスはどうか。律法学者たちはイエスを迫害し、人々の前で食いものにします。その結果、主はご自分のいのちを十字架の上でささげていくことになりました。この方はいのちの全部を投げ入れたのです。主は預言されました。神殿は完全に崩されていく。神殿とは、建物のことを指すと同時に、ご自分の体のことでもあります。ご自分がこれから十字架に向かわれ、そこでいのちをお捨てになると言っているのです。こうやって比べてみると、貧しいやもめの女のしたことがどうしてあれほど高く評価されたのか、理解できるでしょう。やもめの姿は、イエスの姿そのものだったのです。

さて最後に考えます。26節では、人々がやがてこの世界に最悪のことが起る時、それを知って恐ろしさのあまり気を失うとあ

ります。そういう日がやって来るとも言われています。ではイエスがいのちを捨てた意味が何もなかったのでしょうか。そんなことはありません。確かに終わりの日にこの地上のすべてのものは滅びます。けれども、その日、何が起きるのか。主が私たちのところに来られ、私たちを救い出すと約束しています。その救いの日のために、主がいのちを捨てて下さったのです。

ですから、たとえ世界が真っ暗になり、どんなに恐ろしいことが起きても気落ちすることはない。あなたがたはその日、頭を上を上げなさい。そこには光が見えるから。その光を見て耐え忍びなさい。主も十字架で苦しみながら、私たちの苦しみを共にして下さると言ってくださいます。